九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Study on the Modernization of Korean Traditional Music in NANTA

李, 敬美
九州大学大学院芸術工学府

https://doi.org/10.15017/19759

出版情報：九州大学, 2010, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

第2章　韓国伝統音楽の現代化

2.1 作曲を主体にした新国楽の芽生え

伝統楽器を用いて演奏されるが正楽と民俗楽とは異なった曲が初めてみられたのは 1939 年にキム・キス（金琪洙 김기수）[40]が作曲した《황화만년지곡(皇化萬年之曲)》で 1940 年 11 月 9 日に府民館で初演された。《皇化萬年之曲》は詩に曲をつけた声楽曲で日本建国の 2600 年記念公募で選ばれた日本の天皇を賛美する内容である。韓国内で，伝統楽器を用いての作曲に五線譜を使用したのは《皇化萬年之曲》が初めてで李王職雅楽部により初演された。しかし，その後は伝統楽器を用いて新たに作曲しようとする動きは活発にならず，1960 年代まではキム・キスによる作曲がほとんどであった。キム・キスの曲が新たな音楽を生み出そうとしたと評価されるにはいくつかの要因がある。まず西洋音楽の語法，たとえば和声法，を用いて近代五線記譜法で楽譜に書かれていることや，指揮者の存在を前提とした編成が多いことなどが挙げられる。しかし，近代五線記譜法や和声法を用いてもリズムは正楽から借用することがキム・キスの特徴でもある。キム・キスによる作曲活動は新国楽の先掛けとなり，1960 年代からは国楽作曲家として活動をしながら後進養成をした。

1960 年代は伝統音楽に対する韓国政府の支援と伝統音楽機関の努力により伝統音楽の継承のための対策が積極的に実行された。その頃は開院から 10 年を迎えた国立国楽院と 1959 年にできたソウル大学の国楽科が中心となって新しい形の伝統音楽を模索する動きも広まった。1960 年代には正楽と民俗楽を含む伝統音楽を「国楽」と呼ぶことが定着することになり，正楽や民俗楽の要素を含み，それらの伝統楽器のために新しく作曲されるようになった音楽を「新国楽」と呼んだ。1960 年代には伝統楽器を用いた新曲の公募が積極的に行われた。それは日本植民地時代に抹殺の危機にあった伝統音楽を継承することは韓国人とし

[40] キム・キス（金琪洙 김기수）韓国の作曲家。

ての歴史観に影響があるからである。そのため韓国政府は 1960 年から 1970 年にかけて本格的に韓国音楽の継承のため政策的な支援を行い始めた。1962 年に公募された新国楽の条件は民族文化の固有性を主体にすることで伝統楽器による合奏曲と独奏曲に限られていた。公募は新聞などを通して行われ，優勝した作品は同年の 17 周年の独立記念日である 8 月 15 日に受賞式と演奏会が行われた。韓国では独立記念日以外の国家記念日や民族祭日に正楽，民俗楽，創作国楽のプルグラムによる演奏会を開き，伝統音楽の普及と継承のために努力を続けている。

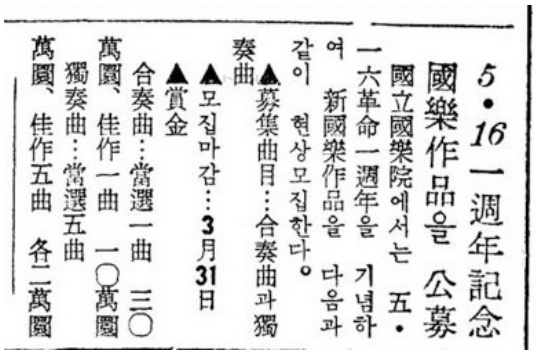
5・16 一週年記念
國樂作品을 公募
國立國樂院에서는 五・
一六革命一週年을 기념하
여 新國樂作品을 다음과
같이 현상모집한다。
▲募集曲目…合奏曲과獨
奏曲
▲모집마감…3月31日
▲賞金
合奏曲…當選一曲 三〇
萬圜、佳作一曲 一〇萬圜
獨奏曲…當選五曲
萬圜、佳作五曲 各二萬圜

図 1-32 1962 年に初めて行われた新国楽公募は韓国の軍事革命である 5・16 の 1 周年記念として国立国楽院の開催で行われた。公募基準は民族文化の固有性を主体にし，国民精神を純化し国家再建の意欲を高めることが出来る健全な内容の曲とし，使用楽器が韓国伝統楽器を用いることに限られた。募集曲目は 15 分内の合奏曲 1 曲，5 分～10 分内の器楽独奏曲が 5 曲であった。（東亜日報 1962 年 2 月 18 日）

1962 年から 1968 年までは「新国楽作品公募」を行い，優勝した曲は受賞式(図 1-33)や新国楽作発表会を通して公開された（図 1-33）。新国楽作品公募と発表会は 1962 年から 1969 年まで毎年行われ，作曲家の登竜門の一つとなった。

1963 年にはソウル大学の国楽科の卒業生により「新国楽芸術会」が結成され，新たな音楽を作曲・発表することを目標にした活動を行った。1960 年代に作曲された曲は伝統楽器の独奏曲と国楽管弦楽曲が多く，1964 年にリサイタルが初めて行われた。新国楽作品公募と新国楽作品発表会の影響で 1960 年代からは伝統楽器を用いた独奏会と西洋の管弦楽団に模した演奏会も行われるようになった（図 1-35）。大学の国楽科では李氏朝鮮時代まで伝統音楽として継承されて

きた正楽と 1900 年代から一般庶民により盛んになった民俗楽の教育を行いながら「伝統音楽の現代化」として新国楽の教育と演奏活動にも努力した。このように戦後には日本植民地時代と朝鮮戦争で断絶の危機にあった伝統音楽の継承のために韓国政府と伝統音楽の公演機関，大学の国楽科が積極的に動いたのが分かる。

図 1-33 新国楽作曲公募から入選した作品には賞金が与えられる同時に国立国楽院で受賞式と発表会も行われた。1967 年のポスター（ジョン・ジヨン『近代性の侵略と 20 世紀韓国の音楽』ブックコリア，2005，pp.203）

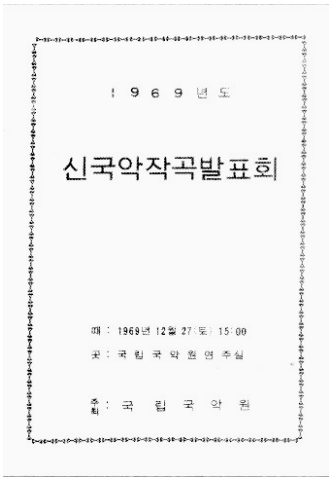

図 1-34　新国楽作曲公募は 1992 年から 1999 年まで毎年行われ，作曲家の登用門となった。1969 年に最後となった新国楽作曲発表会のポスター（ジョン・ジヨン『近代性の侵略と 20 世紀韓国の音楽　』ブックコリア，2005，pp.201）

図 1-35　1960 年代には西洋の管弦楽団に模して椅子に座って演奏する国楽管弦楽団の演奏は伝統音楽の現代化として見られている。1965 年頃（ジョ・ハンボム（徐漢範）『国楽通論』台林出版者，1981，pp.296）

新国楽作品公募と新国楽作品発表会は作曲家達に伝統音楽に基づいた新たな楽曲を作曲しようとする刺激を与えた。1960 年代を代表する曲は 1961 年にジョン・フォィカプ（鄭回甲 정회갑，1923～）の『伽倻琴と管弦楽をための主題と変種曲』は西洋のオーケストラと伝統楽器の競演が初めて行われた曲として高い評価を得ている。ジョン・フォィカプはソウル大学で作曲を指導し，1960 年代からその弟子が作曲活動を行った。

イ・ソンチョン（李成天 이성천，1936～2003）とファン・ビョンキ（黄秉冀 황병기，1936～）はジョン・フォィカ me

プの弟子で 1960 年代を代表する作曲家である。イ・ソンチョンが作曲した曲には正楽や民俗楽のメロディをモチーフした曲が多く，国楽管絃楽曲から独奏曲まで 300 曲に至る。伽倻琴奏者であるファン・ビョンキ（図 1-36）はジョン・フォィカプの『伽倻琴と管弦楽のための主題と変奏曲』の初演後から伽倻琴の作曲家として活動を始める。代表曲には 1963 年に発表した『森』と 1974 年の『沈香踊』などがあり，現在も伽倻琴曲の作曲と演奏会を行っている。ファン・ビョンキの曲は独奏曲が多いがアンサンブル曲もあり，同類楽器による演奏も活発になり小編成の演奏会も多く行われるようになった。

図 1-36 ファン・ビョンキ作曲「ミグン」は演劇家の声を使った叫びや歌などによる口音と伽倻琴演奏曲である。1975 年初演当時の様子。

2.2 国楽管弦楽団の活動

西洋の管弦楽団に模した国楽管弦楽団が登場したのは 1964 年で国楽芸術学校が国楽管弦楽団を創設し，ソウル市民会館で記念公演を行ったことから始まった。その当時は国楽管弦楽団の演奏曲目中の 2 曲だけが国楽管弦楽曲で，他は舞踊と民俗楽の曲で創設公演であって，中身は伝統音楽や踊による総合的な公演であった。国楽芸術学校の国楽管弦楽団は創設記念公演後も音楽的な多様性や楽団の方向性と運営の困難で創設公演のみで解散となった。

国楽芸術学校の国楽管弦楽団は解散したが，翌年の 1965 年にはソウル市立国楽管弦楽団として設立され（図 1-37），現在も活動している。その当時は演奏可能な曲の不足，演奏活動の方向性の問題はまだあったが，ソウル市は国楽を新しく生み出そうとする動きを高く評価し，国楽管弦楽団を積極的に支援した。

国楽管弦楽団は大勢の人数で行われるため，私設団体による運営より国立国楽院のような伝統音楽機関に属して活動するか，公立機関の演奏団体として音楽活動を行うことが多い。国立国楽院や国立劇場に属している国楽管弦楽団は，定期演奏会と，10 月 3 日の建国記念日や日本植民地から解放された 8 月 15 日の独立記念日のように歴史的に重要な日を記念するため公演を行っている（図 1-38）。国楽管絃楽団は外国の楽器との協奏，演劇や舞踊の分野と融合させた演奏，西洋音楽を伝統楽器で演奏するなど様々なスタイルの演奏を試みている（図 1-39）。

図 1-37　市民会館で創団式を行ったソウル市立国楽管弦楽団。定期演奏会を年に 3 回行う予定でこれからの活動が期待されると報道された。(1965 年 2 月 27 日　東亜日報)

図 1-38　国立国楽院は歴史的に重要な日を記念するため公演を行っている。2010 年韓国独立記念 65 周年記念公演の様子。後ろのスクリーンには「歴史の光に向かって」と書かれている。(李敬美撮影 2010 年 8 月 15 日)

図 1-39 国立国楽院の国楽管弦楽団と伝統舞踊の共演が行われている様子。（李敬美撮影 2010 年 8 月 15 日）

2.3 小規模の演奏団体による試み

前述したように 1960 年代からは韓国文化の再建と継承のため韓国政府が積極的に動いた（図 1-40）。1960 年代に始まった国楽作曲は 1970 年代から 1980 年代にかけて更に活発になった。韓国政府は固有の文化や伝統芸術が民族史観価値観に大きい影響を与えると考え本格的に動き始めた。

伝統音楽においては重要無形文化財の拡大と学校教育の時間を多く増配すること，また伝統芸能を学べる施設を増やす動きが各地方で積極的に行われた。国楽の現代化のためには楽器の改良が行われる同時に新しい曲作りの創作活動を広げるため 1973 年から「韓国音楽創作発表会」が行われた。韓国音楽創作発表会が開催されてから「国楽創作」という言葉で呼ぶことになり現在まで続いていて伝統音楽の現代化に寄与している。1960 年代には西洋音楽の和声法を用いて近代五線記譜法で楽譜に書かれるような作曲法と国楽管弦楽団の登場によって国楽管弦楽曲が多く作曲され，1970 年代から 1980 代にかけて定着した。またこの時代には 10 人前後の小編成の国楽室内楽団も見られるようになった。

1985 年に創団された室内楽団スルキドゥンは現在も活動を続けていて西洋楽器とコラボレーションするなど新しい試みを行っている（図 1-41）。また 1978 年には大勢の人数で行われるプンムルが 4 人の奏者で演奏可能なサムルノリに

新しく再創造されてから現在まで演奏されている（図 1-42）。このように 1970 年代から 1980 年代にかけては小編成の演奏団体による活動が多く見られたが，例えば伝統楽器の演奏と演劇のコラボレーション（図 1-43），民謡研究会と伝統楽器の合同演奏会など，以前には行われてなかった実験的な曲や公演スタイルが生まれ始めた。

80年代「새文化韓國」의 起爆

「固有얼」繼承 개발

制度改善·古典정리·創作활동중점 지원

大衆藝術 창달·民族記錄畵제작

「우리것」을찾는 文藝中興

「우리것」에 대한 긍지와자부심의 함양, 올바른 이해는 민족문화 발전의 토대가 된다. 傳統文化복원은 文藝中興계획의 핵심적인 분야로서 총투자액의 60%에달하는 1백50억원이 투입된다. <사진은 통영오광대놀이>

図 1-40　1970 代の韓国政府は 1980 年代を「新たな文化韓国」を作るため努力した。韓国政府は固有の文化や伝統芸術が民族史観価値観に大きい影響を与えると考え，1960 年代からは本格的に韓国文化の再建と継承のため韓国政府が動いた。伝統音楽においては重要無形文化財の拡大と学校教育の時間を多く増配すること，また伝統芸能を学べる施設を増やす動きが各地方で積極的に行われるよう支援した。(京郷新聞 1973 年 10 月 25 日)

図 1-41　国楽室内楽団「スルキドゥン」は 1980 年代から現在まで活動を続けている。1980 年代に伝統楽器とギターなど西洋楽器を用いて演奏した時の様子。（韓明熙『ウリ国楽 100 年』玄岩社，2005，pp.273）

図 1-42　1978 年に初演されたサムルノリは 2008 年に 30 周年を迎え「サムルノリの 30 周年記念公演」が行われ，同年日本ツアーも行われ，東京，名古屋，福岡にて演奏された。左からナム・キムン（南基文），チェ・ジョンシル（崔鍾實），キム・ドクス（金德洙），イ・クァンス（李光壽）。（李敬美撮影 2008 年 6 月 25 日）

図 1-43 空間舎郎ではサムルノリ以外にも伝統劇や現代劇，舞踊など以前には行われてなかった新たな形態の公演が多く行われた。左はサムルノリの李光壽，金德洙で右は伝統楽器と演劇のコラボレーション作品「アイランド」の公演様子。(京郷新聞 1981 年 2 月 5 日)

2.4 表現の多様化による国楽の可能性

1990 年代は伝統音楽の普及と啓蒙を目的に様々な努力が行われた。例えば韓国政府は 1994 年をキャンペインとして「国楽の年」に定め，テレビ番組を通した宣伝や大学国楽祭，国楽作曲祭が行われるなど若い国楽人の発掘にも努力した。1990 年代からは 1980 年代まで活発に行われた作曲中心の試みとは違う形態の公演が行われている。1980 年代に見られ始めた国楽室内楽団が更に活発になり，伽倻琴や大琴だけで構成される同類楽器のアンサンブル団体も見られた（図 1-44）。また「国楽の年」には国楽曲を紹介するテレビ番組が構成され，伝統音楽の普及のために努力した。代表的な番組は「TV 国楽堂（TV 국악당）」「国楽春秋(국악춘추)」「セミキプンムル(새미깊은물)」などがあり，身近に楽しめる国楽のイメージを定着させることに努力した(図 1-45, 図 1-46, 図 1-47)。ラジオにも国楽番組が編成されていて 2000 年には国楽だけを放送する国楽放送局が設立され，現在もソウル，仁川などの首都圏地域を中心に放送されている。この頃からはデレビ番組を通した宣伝や大学国楽祭を通して知られた若者の国楽人の活動が活発になり，正楽や民俗楽，国楽管絃楽曲とも異なる新たな演奏スタイルの試みが多く見られる。

1990 年代には国楽室内楽団，小編成の演奏団体による活動が更に活発になり，新たな形態の演奏も多く見られるようになった。本研究は打楽器中心の伝統音

楽のプンムルから現代化されたサムルノリと演劇と融合させたナンタに見られる現代化を主にしているため，打楽器を中心に再創造されたものを中心に調査を行った。

図 1-44 伽倻琴アンサンブル「四季」は改良伽倻琴を全面的に使用し，現代的な衣装で演奏する新しいスタイルを追求する演奏団体である。当時の記事には「伽倻琴を作った于勒とビバルディが会う時」と書かれ，伽倻琴で西洋音楽と大衆音楽を演奏する新しいスタイルを試みている期待される演奏団体として報道された。（京郷新聞 1999 年 12 月 17 日）

図 1-45 1994 年の国楽の年を迎えてテレビ番組に編成されたプログラム「TV 国楽堂」の録画現場。放送局では国楽の専門番組を制作・放送するため努力した。記事には TV「我々の加楽」新しい味新しいスタイルを探すことで国楽がつまらない固定観念を変えて行くと報道されている。国楽管弦楽団が野外で撮影されている様子。（東亜日報 1994 年 5 月 26 日）

図 1-46　国楽紹介番組「国楽春秋」で国楽管絃楽団が演奏している様子。（韓明熙『ウリ国楽 100 年』玄岩社，2005，pp.275）

図 1-47　国楽紹介番組「セミキプンムル」で伝統楽器の伴奏で国楽歌謡を歌っている様子。（韓明熙『ウリ国楽 100 年』玄岩社，2005，pp.275）

2.4.1 打楽器グループ「ゴンミョン」

サムルノリの影響もあり，1980 年代から 1990 年代は韓国伝統打楽器を中心とした小編成の演奏団体が多く見られるようになった。その中でも 1997 年に創団されたゴンミョン（共鳴　공명）は新たなスタイルの演奏の工夫と自作した楽器を用いたパフォーマンスを通して新たな可能性への追求を続けている（図 1-48）。ゴンミョンは韓国楽器をベースにしてアフリカ打楽器のジャンベやギ

ター，ドラムの楽器とのコラボレーション（図 1-49）を行うなど新たな試みを行っている。ゴンミョンは楽器製作も行っていて 2003 年には MIDI 音源を用いて発音する電子チャングを制作・公開し，電子チャングを用いた活動も行っている（図 1-50）。

図 1-48　打楽器演奏団体ゴンミョンが韓国伝統打楽器をベースにギター，ドラムなとの楽器とのコラボレーションを行っている様子。2003 年。（コンミョン公式ホームページ http://www.gongmyoung.co.kr/　アクセス日 2010 年 8 月 31 日）

図 1-49　伝統打楽器とアフリカ打楽器を用いて演奏している。2003 年。（コンミョン公式ホームページ http://www.gongmyoung.co.kr/　アクセス日 2010 年 8 月 31 日）

図 1-50　電子チャングと伝統管楽器による演奏様子。電子チャングはゴムパットを叩くと MIDI の音源が流れる電子ドラムのような構造でゴンミョンが制作した。2003 年。（コンミョン公式ホームページ http://www.gongmyoung.co.kr/　アクセス日 2010 年 8 月 31 日）

2.4.2 演劇と融合させた「ナンタ」

打楽器を用いた創作活動は続けられて，サムルノリと演劇を融合したナンタは 1997 年 10 月にソウルのホアムアートホールで初演された。韓国伝統音楽の新しい試みの中で最も成功した事例として挙げられているナンタは包丁とまな板を用いて公演を行うことで話題になった。ナンタは厨房中で起きる物語を中心としたストーリーで実際に料理をしながら厨房器具を用いて演奏を行うナンタは現在，4 つの専用劇場でほぼ毎日上演されている。1998 年 8 月のエディンバラ・フェスティバルの参加後から一躍世界で注目を集めたナンタは現在も国内と海外で公演を行っている。海外の進出を目標にして制作されたナンタは作品の完成度を高めて 専用劇場 で恒常的な上演と海外のツアーを積極的に行っている。2008 年 6 月には国内・海外の総観客は 400 万人を突破するなど観光の目玉になっている（図 1-51）　。

Enjoy Seoul

ソウルを楽しむ

ノンバーバル・パフォーマンス

体に響く
リズムが刺激的

パフォーマンスが楽しいお芝居は韓国語がわからなくても大丈夫！

ロングランの人気パフォーマンス

NANTA

世界各国で上演され、高い評価を受けているパフォーマンス、NANTA（ナンタ）。漢字で「亂打」と書くように、主人公の料理人たちがセリフの代わりに厨房のありとあらゆるものを乱れ打ちしながらストーリーが進む。韓国の民俗音楽「サムルノリ」をベースにした独特のリズムに合わせて繰り広げられるステージは圧巻。

支配人からいきなり無理な宴会料理のオーダーを受けることになったシェフたち

さらには料理は素人の支配人の嫁がアシストにつけられるというおまけつき

料理は無事にできあがるのだろうか？　コミカルな演技が観客の笑いを誘う

バーカッシブなパフォーマンスが繰り広げられる舞台。音楽という世界共通の言語でステージが進行するので、大人から子供まで幅広く楽しむことができる

厨房のさまざまなものを楽器にしながらテンポよく進むステージは、世界各国の観光客からも高い評価を受けている。ソウルへ行くなら観劇の予定も入れてみては

DATA

NANTA

MP P-66-B-2
住所 중구 정동22 스타식스 정동아트홀
☎(02) 739-8288(公演問い合わせおよび、予約案内、日本語可／(03) 4570-9323(東京、フリーダイアル)　開月～土 14:00～、17:00～、20:00～、日祝15:00～、18:00～
料 なし　席 S席W5、VIP席W6万　カード A J M V
交 地下鉄1、2号線 ⑮⑯「市庁」駅1番出口徒歩10分／5号線 ⑦「西大門」駅5番出口徒歩5分
URL nanta.i-pmc.co.kr

146

図 1-51 『地球の歩き方』の Enjoy ソウルに紹介されている。紹介文には世界各国で上演され，高い評価を受けているパフォーマンスナンタは韓国民族音楽「サムルノリ」をベースにした独特のリズムに合わせて繰り広げられると書かれている。(地球の歩き方編集室『地球の歩き方 韓国'08～'09』ダイヤモンド・ビッグ社，2008，pp.146)

2.4.3 ロックミュージックと融合させた「DoodRock」

DoodRock はサムルノリの奏者として活動していた打楽器奏者を中心としたメンバーで 1998 年に創団された。DoodRock は韓国伝統打楽器を用いて現代的なロックビートを演奏する演奏団体として知られている。韓国伝統リズムとロックを融合させることで新しいスタイルの公演を生み出している。現在は韓国伝統打楽器とドラム，自作した楽器を用いてサムルノリとロックを融合させたパフォーマンスを行っている（図 1-55，図 1-54，図 1-53）。

또하나의 두들기기 '두드락'

전통타악기로 현대적인 비트 연출

윤자경 기자

두드리는 공연이 인기를 얻고 있다.

올 초 PMC환퍼포먼스의 '난타'가 재공연해 대성공한데 이어 또 하나의 타악 공연 '두드락'이 지난해에 이어 앵콜공연을 갖는다.

등 전통 타악기를 현대적인 비트로 새롭게 연출해 보여주는 공연이다.

막대기 깡통 엿가위 대나무 등 일상의 사물을 이용해 생활 속에서 접할 수 있는 소리들을 새롭게 들려준다.

여기에 마임 코

図 1-52　記事にはナンタの再公演が大成功した以来，打楽器による演奏団体が人気を集めていと書かれ，新しい打楽器演奏団体として DoodRock を紹介している。タイトルには「もう一つの叩き'トゥドゥラック'伝統打楽器で現代的ビートを演出」と書かれている。(毎日経済 1999 年 3 月 2 日)

図 1-53　1 台のドラムと自作した打楽器を用いてパフォーマンスを行っている。DoodRock の定期演奏様子。 (DoodRock 公式ホームページ　http://www.doodrock.co.kr/　2010 年 8 月 31 日アクセス)

図 1-54　全面で韓国伝統打楽器を用いてパフォーマンスを行っている。DoodRock の定期演奏様子。（DoodRock 公式ホームページ（http://www.doodrock.co.kr/　2010 年 8 月 31 日アクセス）

図 1-55　ドラムの伴奏に合わせて伝統芸能のボナ（お皿回し）を行っている様子。（DoodRock 公式ホームページ http://www.doodrock.co.kr/ 2010 年 8 月 31 日アクセス）

2.4.4 伝統音楽のメディアアートへの展開

国楽を用いた新たな試みはエレクトロ，ヒップホップのダンサーとのコラボレーション，更には電子音楽との融合まで多く見られている。作曲家ファン･ソンホは韓国の詩調を音律に乗せて歌う声楽のジャンル「ガゴック（歌曲）」のライブ演奏にもとづく伝統的な素材とコンピュータを取り込んだ《Imagery Gagok》を通して電子音楽と国楽の融合を試みた。《Imagery Gagok》の伝統的要素へのアプローチは韓国伝統ガゴックを主な素材にした上に韓国伝統管楽器であるデグムを取り込んでいるところにある。ガゴックはライブで演奏され，デジタル音響パートはデグムの音と電子音からなっている。《Imagery Gagok》は 2000 年横浜アジアン･ミュジック･ウィーク 2000[41]で初演された以来，韓国と国外でも再演され，2002 年には中学校３年の音楽教科書に収録された。

イ・キョンミ（李敬美　이경미）は国楽を用いてメディアアートへ展開させる作品制作と上演を行い，表現の幅を広げようとしている。イ・キョンミは韓国の伝統打楽器演奏を専門的に学び，特にサムルノリの奏者として活動してきた。また伝統様式を伝承することと同時に，日本の和太鼓やアフリカの打楽器とのコラボレーションなど新たな表現を試みた。その活動の中で表現の可能性を広げるため念頭においているのは韓国伝統音楽とコンピュータとを結びつけた新たな上演形態の追求である。イ・キョンミは韓国伝統音楽と伝統的要素を重要視しながら，韓国伝統打楽器を用いてデジタル技術を積極的に取り入れた新たな表現に展開させることで伝統音楽の可能性を追究している。(作品についての詳細は巻末の付録を参照)

その以外にも韓国伝統打楽器を用いて表現を広げようとする動きは続けられていて 2010 年にはサムルノリの創始者であるキム・ドクスを中心としたインタラクティブ公演が行われた（図 1-57）。2010 年 1 月 27 日から 31 日まで韓国ソウルの伝統演劇劇場グァンファムンアートホールにて行われた「ディジログサムルノリ」は韓国伝統打楽器奏者の金徳洙と弟子の演奏，伝統舞踊，パンソリを音響と映像によって行われた（筆者は 1 月 30 日の公演を鑑賞調査）。舞台上

[41] アジア音楽祭 2000 in 横浜（Yokohama Asian Music Week 2000）

での踊り，歌などの伝統芸術に現代の技術を加えたことで話題になり，新しい分野と融合させた一例として挙げられるなど高い評価を得た。

図 1-56　インタラクティブ作品『In’0』（九州大学芸術工学府中村研究室撮影 2007 年）

図 1-57　『Digilog』は伝統芸能の舞踊とパンソリ，サムルノリの演奏により映像が反応されるインタラクティブ作品である。サムルノリの演奏により花びらが落ちるような場面を演出している。（世界文化芸術教育大会公式ホームページ http://www.artsedu2010.kr/ 2010 年 9 月 1 日 アクセス）

2.5 伝統音楽の現代化についての考察とまとめ

韓国において李氏王朝が存在した 1900 年代前後までは儀式音楽が重要視されたため，宮廷音楽が伝統音楽と見なされて継承されてきた。しかし，1948 年に韓国政府が樹立されてから伝統音楽として考えられたのは李氏朝鮮時代まで宮廷で継承されてきた音楽を「正楽」に，18 世紀から 19 世紀にかけて盛んになった一般庶民の中で発生して発展してきた音楽を「民俗楽」に分類し，韓国で継承されて来た伝統音楽の全てを「国楽」とした。そして，韓国の国立国楽院を含む音楽演奏機関や大学の国楽科などの伝統音楽機関では正楽と民俗楽の両方を視野に入れて実技と作曲や理論の教育と演奏活動を行っている。韓国政府は無形文化材制度を実行することで伝統音楽のそのものまま保存・継承に努力しながら現代の要素を加味した新たな可能性に対しても積極的に支援した。

1960 年代からは伝統楽器を用いて作曲・発表を始め，「伝統音楽の現代化」の努力をしている。1964 年には西洋の管絃楽団に模して国楽管絃楽団が設立され，現在は全国の地域に市立や道立に属して活動している。1960 年代に初めて登場した国楽管絃楽曲に対する実技授業は大学の国楽科の教育課程に入っていて，古代から受け継がれてきた正楽と民俗楽と一緒に創作国楽として継承されている。また 1970 年代からは伝統音楽と演劇，現代舞踊，西洋の楽曲との実験的な公演も続けられている。韓国政府は伝統音楽の保存のために無形重要文化財制度の導入することど同時に伝統楽器が西洋の楽曲の表現まで広げることができるように楽器改良も積極的に行った。

このように韓国の伝統音楽公演機関や教育機関では韓国伝統音楽として伝統的な形を守って継承する活動と伝統的な演奏形態を保ちつつ新たな表現形態が試みられている活動や研究も行われるようになってきた。そこで時代性を加味した伝統音楽の再創造を「現代化」と呼ぶ。韓国伝統音楽の伝承と新しい試みについて，音楽評論家のユンジュンガンは以下のように述べている[42]。

[42] ユン・ジュンカン（尹重剛）「創作をための苗代として伝統を認識する若者の音楽」『文化芸術誌』，1999［原書名：윤중강「창작을 위한 못자리로서의 전통을 인식하는 젊은이의 음악」『문화예술지』，1999］

伝統は‘現在形’で存在し，伝統は新しい‘創作’の為の苗代になる。1999 年この重大な時期に改めて‘伝統’の意味を整理する必要がある。伝統というものは変化しない固定体ではない。変化する遊動体である。時代によって伝統の外貌は変わる。重要なのは伝統の中身を読み出すことである。（李敬美　訳）

以上のことから韓国では古代から継承されてきた伝統を固定した形で継承するだけではなく，時代により変化，遊動体として考えていることが分かる。そして大学の国楽科の教育と伝統音楽の新たな試みはこのような伝統音楽に対する思いで生まれていると考えられる。1960 年代から現在まで行われている伝統音楽の再創造による現代化は以下のように分類することが出来る。

(1) 演奏会場を変える。例えば野外で演奏を行ってきたものを室内でも演奏可能なようにして舞台芸術とする。
(2) 楽器編成や楽器の役割を変える。また，舞踊，美術，演劇など他の芸術の要素を加えて新たな分野として再構成する。
(3) 西洋芸術芸能の要素を韓国伝統芸能の要素に融合させる。
(4) 韓国伝統楽器を改良する。
(5) 現代のデジタル技術を応用してメディアアートとしての側面を持たせる。